



犬の王様 (1)

むかしある国に独り者の王様が
ありました。家来がどんなにおす
すめしてもお妃をお迎えにならず、
お子様もない代りに一匹の犬を育
てて毎晩可愛がって、「息子よ息
子よ」とよんで、毎日この犬を連
れては山を歩くのを何よりの楽し
みにしておいでになりました。

そのうちに王様はちょっとした
病気で亡くなられましたが、その



犬の王様 (2)

御遺言には「俺が死んだら息子を王様とせよ。そうしたら俺が妃を迎えなかったわけがわかるであろう」との事でした。この国の家来は皆忠義者ばかりでしたから、変な事とは思いましたが、とうとう王様の「息子」の犬を王様にきめて、いろいろの政は今までの総理大臣がする事になりました。

国中の人間はこのお布告ふれを見る



犬の王様 (3)

と大騒ぎをして、お祝いの支度を始めました。

その犬は狸のようなつまらない汚い犬でしたが、いよいよお祝いの当日になりますと、金襴の着物を着て王様のお椅子に着いて、大勢の家来や人民にお目見得をさせる事になりました。

お目見得に来た人民の中に一人の婆さんがいて、一匹の三毛猫を





犬の王様 (4)

抱いて犬の王様の前に出てお辞儀
をしました。三毛猫は驚きました。
たちま
忽ちお婆さんの手から飛び出して、
「フーツ」

と言うとそのまま一目散に山の
方へ逃げ出しました。犬も何で知
らぬ顔をしまししょう。金襴の着物
を着たまま儘王様の椅子を飛び降りて
「ワンワンワンワン」と吠えなが
ら一所懸命に追っかけました。



犬の王様 (5)

御家来や人民共の騒ぎは又大変でした。中にも総理大臣は騎兵を繰り出して真先に立って馬を躍らせながら、何処までもとあとをつけて行きました。

山奥に来ると向うに一つの洞穴があって、その中に犬が駆け込むのが見えました。

つづく

